

ここでは、本文中で紹介した主な古典籍所蔵機関について概略を解説する。
(配列は五十音順)

■**葵文庫**（現在の所在：静岡県立中央図書館）

江戸幕府の公的な諸機関（蕃書調所、開成所、昌平坂学問所等）の旧蔵書。

江戸幕府崩壊とともに、徳川家は駿府に移封された。これにともない、幕府諸機関の蔵書や学問所の教授陣なども駿府にもたらされ、藩では、これを基に府中学問所を設立し教育にあたった。明治に入り、この学問所が廃校となると、蔵書は静岡県庁に受け継がれ、変遷の末、現在は静岡県立中央図書館が管理している。

この蔵書は、洋書が多く、なおかつ蘭書に加えて英書、仏書が多く含まれることが特徴となっている。

■**浅草文庫**→「書籍館」を見よ

■**永青文庫**（現在の所在：東京都文京区目白台の細川邸内(永青文庫美術館)）

旧熊本藩主細川家伝来の歴史資料や美術品等の文化財を、保存・研究し一般に公開している文庫。細川家の菩提寺永源庵の「永」と、細川家初代藤孝の居城だった青竜寺城の「青」をとってこの名がある。伝来のもののうち、美術品と武具は目白台（永青文庫美術館）にあるが、膨大な量の藩政史料は熊本大学付属図書館永青文庫に寄託されている。

■**大阪天満宮文庫**（現在の所在：大阪天満宮）

享保15年(1730)、大阪書林（書店・版元）の有志が「天満宮御文庫講」を結成した。これは大阪天満宮を信仰するとともに、出版する書の初摺りを販売に先立って奉納し、加護を祈念したもので、この奉納書を収めるために御文庫の建物が建てられた。天満宮御文庫講は、同様の組織である住吉御文庫講と合併し、「大阪書林御文庫講」となっている。

御文庫は、天保8年(1837)の大塩平八郎の乱で庫内の書物が全て焼失し一時荒廃したが、大正11年には北区旅籠町で猶興書院を営んでいた漢学者近藤元粹（号は南州）翁の「蛭雪軒蔵書」約2万冊が寄進されたのをはじめ、大阪書林の人々の献本などによって再建された。

■**加賀文庫**（現在の所在：都立中央図書館）

都立中央図書館の特別文庫のひとつ。実業家・加賀豊三郎(1872-1944)の蔵書を、昭和19年に東京都が戦時特別買上げ図書として一括購入したものの。内容は江戸文化・文芸に関わる近世の版本・写本類を主とするもので、中でも黄表紙（江戸期の草双紙）、洒落本が充実している。

■**加越能文庫**（現在の所在：金沢市玉川図書館近世史料館）

昭和23年尊経閣文庫から金沢市に寄贈された旧加賀藩ないし加賀、越中、能登関係の史料群。史料の大部分は明治初年から御家禄方および前田家編輯方が、前田家とその治政の歴史を編纂するために収集したもので、藩庁公務

関係の資料が多く、加賀藩研究において欠かせないものとなっている。

■**青山文庫**（現在の所在：国立国会図書館）

埼玉県会議長、貴族院議員を歴任し、国語学者・考古学者でもあった根岸武香（たけか）の旧蔵本。名称は、武香の在住地名による。別名「根岸文庫」。

武香は、埼玉県政や国政に奔走する一方、古器物、古籍の研究を行い、また『新編武蔵国風土記稿』の出版（明治17年）も行った。

蔵書の内容は、①古文書田券類②武家文書③古写経④地誌・地図類⑤名家自筆本⑥古銭関係⑦印譜及び古印関係、その他有職故実、茶道関係等多岐にわたる。

■**神習（かんならい）文庫**（現在の所在：財団法人無窮会（町田市））

明治期の神道・国学の大家井上頼函（1839-1914）の旧蔵書。神道、古医書、近世名家自筆本、「玉籠」（頼函筆写の稀覯本コレクション）などを含む。

大正4年、平沼騏一郎は井上頼函の遺蔵書を一括購入し、それまで所蔵していた蔵書とともに寄付して無窮会を設立した。無窮会はその後も、国学者、漢学者の蔵書を中心に収集して東洋学全般に及ぶコレクションとなっている。

■**栗田文庫**

明治から昭和初期に活躍した国史学者・栗田元次旧蔵本。栗田自身が編輯した「栗田文庫善本書目」には660点あまりが掲載されるが、広島原爆によりかなりの部分が焼失し、現存するのは270点あまりといわれる。

栗田元次は、近世史が専門で、東京帝国大学卒業後は史料編纂官補として「大日本史料」の編纂に従事した。古典籍・古地図の収集で知られる蔵書家でもあった。

■**幸田文庫**（現在の所在：慶應義塾図書館）

幸田成友の旧蔵本。幸田成友は「大阪市史」などを手がけた歴史家で、「原典にかえれ」をモットーに実証主義史学を実践した。また経済や交通史にも関心が高く、「日本経済史研究」や「日欧交通史」などを著した。

蔵書は、国史関係と日欧通交史関係に善本が多いが、古文書など、他にも多岐にわたる構成となっている。

■**彰考館文庫**（現在の所在：財団法人水府明徳会（茨城県水戸市））

彰考館は、水戸藩2代藩主徳川光圀が明暦3年（1657）に開設した「大日本史」の編纂局。修史事業のほかにも古典の校訂、参考図書編纂、藩士の教育なども行った。「大日本史」の編纂は明治39年（1906）終了し彰考館も閉館されたが、明治42年に彰考館文庫が新築され、ここに彰考館の蔵書が架蔵された。その蔵書の大部分は第2次大戦の戦災で焼失したが、これを免れた蔵書にその他の資料を加え、昭和38年博物館の指定を受けて復興している。

「大日本史」草稿本および編纂関係資料をはじめ、史学、国文学の研究に有用な資料が多い。

■書籍館（しょじゃくかん）

現在の国立国会図書館の源流となった図書館。国立国会図書館は、議会図書館（国会の図書館）と帝国図書館（国の中央図書館）のふたつの性格を合わせ持つが、書籍館は後者の端緒である。

書籍館は、明治5年旧幕府の昌平坂学問所、蕃所調所、和学講談所などの蔵書を受け継いで、文部省所管の図書館として開設された。翌年、太政官博覧会事務局の所管となり、明治7年には浅草に移転して、**浅草文庫**と改称された。明治8年再び文部省所管となり移転するが、この時蔵書のほとんどは浅草文庫に残されたため、文部省から図書の交付をうけて東京書籍館として再開した。したがって、国立国会図書館の組織としての源流は書籍館とされるが、蔵書の源流はこの東京書籍館と見ることができる。なお、浅草文庫の蔵書はそのほとんどが現在国立公文書館の所蔵となっている。

■神宮文庫（現在の所在：三重県伊勢市神田久志本町）

明治40年に開設された伊勢神宮の文庫。豊宮崎文庫（外宮）と林崎文庫（内宮）を中心に統合し開設された。古くは奈良時代の内宮文殿や鎌倉時代の外宮神庫にさかのぼる。

伊勢神宮の記録文書のほか、古人の筆による神道や国史学の書、あるいは文学、詩学等の書籍を所蔵する。国宝「玉篇」（6世紀の中国の字書）をはじめ、多くの重要文化財などを架蔵し、神奈川県関係の史料では「天養記」（天養元年に鵠沼郷で起きた事件に関する文書）がある。

■静嘉堂文庫（現在の所在：静嘉堂文庫美術館（世田谷区岡本））

三菱財閥第2代総帥岩崎弥之助が明治25年(1892)に設立。和漢の散亡を防ぐとともに、恩師であり国の修史事業に関わった重野安繹（しげの・やすつぐ）の研究を援助することを目的として設立され、弥之助の嗣子小弥太はこの拡充に努めた。戦後、財政難から一時期国立国会図書館の支部図書館となったが、現在は再び、財団法人静嘉堂によって運営されている。

蔵書約20万冊の内容は、およそ12万冊が漢籍、8万冊が国書である。明治40年に清国の蔵書家陸心源の遺蔵書を購入したことはよく知られるが、これには宋・元の旧刻が多く含まれる。

■聖藩文庫（現在の所蔵：加賀市立図書館）

聖藩とは「大聖寺藩」の略で、すなわち藩伝来の書籍を意味してこの文庫名がある。しかし実際の蔵書の中心は、藩学校の旧蔵本であり、藩政の文書はほとんど含まれない。また廃藩後の学校、図書館の旧蔵本など、昭和初期のものも含まれる。したがって、藩政よりもむしろ藩学校での教育内容等が伺い知られる蔵書構成といえる。具体的には、蔵書の半分以上を歴史関係資料が占めており、中でも軍記類が多いとされる。

■尊経閣文庫（現在の所在：前田育徳会（目黒区駒場））

加賀藩前田家が襲蔵した典籍・文書類を収める図書館。中でも五代綱紀は、万治2年ごろから熱心に典籍・文書類を収集したといわれ、綱紀が蒐集した和漢韓の写本・刊本が蔵書の中核となっている。藤原定家自筆の「土佐

日記」が伝わることで著名。現在は、財団法人前田育徳会によって運営されている。

なお、加越能三州（加賀、越中、能登）の郷土資料も伝わっていたが、その大部分は現在金沢市立玉川図書館近世史料館の所蔵（加越能文庫）となっている。

■天理図書館（現在の所在：天理大学）

正式名称「天理大学付属図書館」。天理教布教伝道に必要な資料の収集・調査研究を目的として大正期に設立された図書館。蔵書は多岐にわたるが、特に宗教学、東洋学、オリエント学、地理学、言語学、国語国文学などの分野が出色。また、伊藤仁斎以下代々の蔵書を取めた古義堂文庫は著名である。天理大学の附属施設となっているが、一般にも公開されている。

■東京大学史料編纂所

東京大学の付置研究所。日本史に関する史料の研究・編纂・出版をおもな事業とし、『大日本史料』『大日本古文書』などを刊行している。また、現在ではこれに加えて、総合的な歴史情報データベースの構築なども行われている。

この研究所の端緒は、江戸期の和学講談所『史料』編纂事業にさかのぼる。和学講談所では六国史以来の国史の編纂を試みたが、完成をみななかった。明治政府はこれを引き継ぎ、史料編輯国史校正局を開設、これがその後、太政官正院歴史課、太政官修史局、太政官修史館、内閣臨時修史局と変遷し、明治21年10月の帝国大学臨時編年史編纂掛の設置へとつながった。更に文科大学史誌編纂掛、文科大学史料編纂掛と名称を変えるとともに、国史編纂という事業から、編年史料の編纂へと事業の目的を変えて『大日本史料』『大日本古文書』の刊行が開始された。昭和4年には史料編纂所と改称されて、現在の東京大学史料編纂所に至っている。

■内閣文庫（現在の所在：国立公文書館内（千代田区北の丸））

太政官正院歴史課図書掛、太政官記録課を母体とし、明治17年(1884)1月24日の太政官達11号によって、各官庁の中央図書館として設置された太政官文庫を始まりとする。翌年(明治18年12月)の内閣制度創始により内閣文庫として発足した。

江戸幕府の紅葉山文庫本、昌平坂学問所本、医学館本、和学講談所本などが蔵書の根幹となっており、国書では近世史資料、江戸幕府の記録や編さん物、明治前期の官庁刊行物が豊富である。

■南葵（なんき）文庫（現在の所在：東京大学）

紀州徳川家当主・徳川頼倫（1872-1925）が、紀伊徳川家に伝来する家康の御譲本をもとに私財を投じて創設した文庫。日本図書館協会総裁なども歴任した頼倫は、戦前の日本において積極的に文化行政を推進した人物である。

紀州の「南紀」から南を、徳川家の家紋から葵の字をとって命名された「南葵文庫」は、当初独立した図書館として当時の麻布区（現・港区）に設置された。しかし、関東大震災で東京帝国大学附属図書館の約50万冊にのぼ

る蔵書がほぼ全て焼失したのに際して、頼倫はこれを憂い、南葵文庫の蔵書のほとんど全てを寄贈した。これが現在東京大学付属図書館の特別コレクションとなっている「南葵文庫」である。

■**蓬左文庫**（現在の所在：名古屋市蓬左文庫（名古屋博物館分館））

「蓬左」とは江戸時代に使用された名古屋の別称。名古屋城は蓬左城とも呼ばれた。

蓬左文庫の始まりは、尾張藩の書物庫である「御文庫」である。「御文庫」は徳川家康の死去によって紀伊、水戸とともに尾張藩に譲渡された蔵書（駿河御譲本 するがおゆずりぼん）から形成され、その後の歴代藩主によって拡大された。第19代藩主徳川義親がこの蔵書（名古屋城（蓬左城）内にあった蔵書）に「蓬左文庫」と命名し、昭和10年に公開文庫として開館された。

蔵書の内容は、金沢文庫本や朝鮮の金属古活字本など、優れた書物が多い。また今日、紀伊や水戸ではその実体を確認できない「駿河御譲本」の原型を留めた史料群としても貴重なものである。

■**松平文庫**（現在の所在：島原図書館（長崎県））

寛永9年、島原藩主となった松平忠房が創設した「尚舎源忠房（しょうしゃみなもとただふさ）文庫」を端緒とする。藩校・稽古館ではこの蔵書が教科書とされた。廃藩後には「松原文庫」と称され、戦後島原公民館を経て現在の島原図書館が管理することとなった。紅葉山文庫、林家、水戸徳川家などの蔵書を書写したものなどが多く含まれる。

■**紅葉山文庫**（現在の所在：国立公文書館・内閣文庫）

江戸幕府が将軍の政務と教養に資するために江戸城内に設けた一種の図書館。徳川家康が慶長7年、江戸城本丸南端富士見の亭に建てた文庫に端を発する。寛永16年（1639）、城内紅葉山に隣接する地に書物蔵を新築したことに因んで、明治以降これを紅葉山文庫と呼んだ。ただし、江戸期には特段の名称はなく御文庫とのみ呼ばれており、蔵書印も使用されなかった。このため、現在紅葉山文庫本の識別に用いられる蔵書印（「秘閣図書之章」等）は、すべて明治期に押されたものである。

蔵書は、家康が命じて書写させた古書や、幕府官撰の献上本、林家や塙家など諸家の献上本などが含まれる。保存状態も非常によい。

■**和学講談所**（現在の所在：国立公文書館・内閣文庫）

寛政5年（1793）、塙保己一が幕府に願い出て設立された和学の講習兼編纂所。寛政7年には林大学頭支配となり幕府直轄の学校となっている。古書の書写・蒐集、古典の校訂なども行われ、従来保己一の個人事業であった「群書類従」刊行事業もここに吸収された。明治元年（もしくは慶應3年）に廃止されたが、その蔵書は明治5年に書籍館に献納され、浅草文庫を経て現在は内閣文庫に納められている。